

独^{ひと}り善^よがりへの挑^ち戦^{ょうせん}

(唯^{ゆい}我^が独^{どく}尊^{そん})

「天上天下唯我独尊」

釈尊が生まれた時、一手は天を指し、一手は地を指し、即行七歩、四方を顧みて言った。宇宙間に自分より尊いものはないという意。

「唯我独尊」

世の中で自分一人だけがすぐれているとすること。ひとりよがり

広辞苑より

「唯我独尊」の広辞苑の意味が「独り善がり」であることに驚き、筆を執りました。

昨年の夏、広島市長が「唯我独尊主義」という造語を使い、平和宣言するニュースを見て、「なんということか」と思いました。

後に、仏教関係者から抗議があり、市長は取り下げました。

しかし、なぜ「唯我独尊」の意味が、「独り善がり」なのでしょう。

自我の意味を「ひとりよがり」や「うぬぼれ」とするなら、頷けます。

しかし、なぜ日本の叡智の結晶である、辞書や辞典が、「唯我独尊」を、「ひとりよがり」や「うぬぼれ」という、悲しい意味付けをしているのでしょうか。

花まつり (一)

釈迦は、生まれてすぐ「天上天下唯我独尊」と言われました。

「この世の中で、ただ我が一人尊い」と読めます。

人間は一人の例外もなく、独りで生まれ、独りで死んで行きます。この事実は釈迦も私達も同じです。一人とは大勢の中に生きる、たつた独りの自分です。

この自分を、我といいます。

ですから釈迦は、我一人が尊いと言われました。

つまりこの世の中の、たつた独りの我と言う自分だけが尊いのです。

この世の中のたつた独りの我なら、私も貴方も、俺もお前も総て我です。この総ての我が独り尊いと言う事は、俺もお前も、私も貴方も、総ての人々が尊いと言う意味です。

つまり、天上天下のこの世の中で、「ただ我が、独り尊い」のです。

ですから親は、吾が子の成長を願って、四月八日の釈迦の誕生日には、唯我独尊のお姿を花でくるみ、甘茶を掛けてお祭りしました。

なぜなら、吾が子もまた、天上天下唯我独尊の子だからです。

これが日本の常識でした。

生まれたばかりの赤子には、自我が有りません。赤子の我は、真我と
言う無心の我です。
以上の意味が「天上天下唯我独尊」の、素朴な日本人の常識でした。



知多市佐布里の照徳寺

自我 (二)

ところが、「唯我独尊」の、人間の実態を見直してみると。人は生まれ堕ちると同時に、真我に小我が芽生え、赤子にも自我が固まつて行きます。

するとこの世の中の有りとあらゆる物に意味が生まれ、善だ悪だ、美だ醜だと価値が付けられ、損だ得だと争いが始まり、幾千年、幾万年の長きに渡つて、人々は戦いを繰り返し、大量の血を流して今日に到りました。この間の不幸や損害は、自然界の、災害の比では無い、オドロオドロシイ限りです。それでもまだ、人間は目覚める事が出来ません。

なぜなら、自我が人間だからです。

人は「オギヤーオギヤー」と泣きながら、生まれると同時に小我が芽生え、「乳をくれ、おむつを替えろ」と母を困らせながら、いつの間にか、小我を自分だと思つていききます。すると小我は、この世の中で俺が一番偉い、俺に勝る者は無い、と、うぬぼれる様になり、自己中心の自我が固まつていきます。するとこの自我に人々は振り回され、諍いを重ねながら、自己主張の度に、我を張るようになって行きます

この様な自我も含めて、釈迦は、ただの我(唯我)を、一人尊い(独尊)と言われました。ええつ、「うぬぼれ」を尊いと言われたのですか。

はい、その通りです。

サルナートの説法 (三)

釈迦は二十九歳で出家しました。それから六年、難行苦行して、山を下りて後、しばらくして、菩提樹の木の下で大我に目覚めました。

つまり小我の拘りから離れて、大我の目が開いたのです。この大我の目覚めを、悟りと言います。

ここで、釈迦は初めて説法を行い、中道・縁起・四諦・八正道を説かれました。

中道とは

なかほどの道を行く事です。

善悪・美醜・損得・総ての中道を行くのです。

(中道とはあいまいでは有りません。)

世の中的一切を平等の心で見える事です。一方だけを見て、他を無視する事が有つては、中道ではありません。自分を見返す時も同じです。常に平等の心で自分自身を見て、悪に染つていないか、善にかぶれていないかを、確認しながら中道を行くのです。

縁起とは 四諦とは

一切の事には原因が有ります。私達は因果縁の縁起に生きています。この事実を見極める事です。人間には四つの真実があります。この真実が、世の中に実在する事を、しっかりと諦める事です。

「諦めるとは」明らかにすると言う意味です。

物事は明らかになれば、諦めることができます。

苦諦……苦は小我だと、諦める事です。

集諦……小我は因縁の集まりだと、諦める事です。

滅諦……小我を滅せば大我に目覚めると、諦めることです。

道諦……大我とは真我に還ると、諦める事です。

これを四聖諦と言います。

この四聖諦の中の苦諦と集諦は、私達にも経験がありますから判ります。しかし滅諦と道諦は、私達には経験が有りませんから、本当かどうか判りません。しかし釈迦が説かれた教えですから、修行者や信者達は、苦諦・集諦の欲望を離れ、滅諦と言う大我を求めて修行しました。このような修行者を私達は敬いました。

しかし実際に滅諦を諦めた人は、釈迦以外に実在したのでしょうか。判りません。しかし、羅漢様は、滅諦を諦め、悟りを得た方々と聞いています。達磨大師もおそらく滅諦を諦めた方でしょう。しかし達磨の弟子に成りたいと言って、左腕を切り落とし、それを差し出しながら入門を願った慧可は、どうだったのでしょうか。有名な「慧可断臂」の達磨図国宝に出てくる慧可は、滅諦を諦めた人なののでしょうか。私は知りません。

それどころか滅諦の真実が、人間が経験出来る事実であると、今も信じている人が居るのででしょうか。今の世界には、もう居ないのではないのでしょうか。

滅諦すれば、小我を滅し大我の目が開くと説いた釈迦の教えは、言葉だけの戯言であり、心の真実だと思ふ人は、もうこの世には居ないのではないのでしょうか。